

活性化センターからのお知らせ

土壌酸度（pH）について

おいしい野菜をつくるためには、勘にたよらない正確な土壌診断分析が世界中ですすめられており、その中でpHは、土壌の酸性度を示して、「ペーハー」や「ピーエッチ」と呼んでいます。

土壌において、pHの適正範囲は「6.0～6.5」の微酸性で、pH6.5～7.0を超えると「アルカリ性」になります。土壌pHが5.5を下回ると土壌中の有害な「アルミニウム」が溶け出して、根に障害を起こして窒素・リン酸・カリの養分を吸収できなくなります。

逆に、アルカリ性になると作物に必須の微量元素が吸収できなくなり、欠乏症が発生します。

pHが高い方を好む作物は、テンサイやキャベツです。酸性を好むのはバレイショです。今回使用するグラフは平成30年度の分析結果から抜粋したものです。

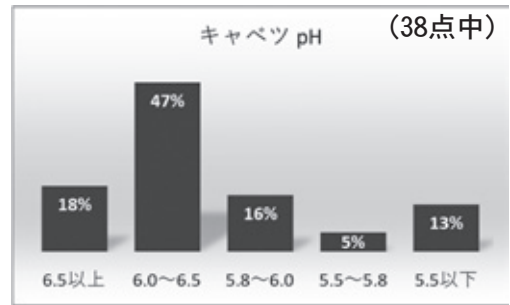


図-1

図-1に平成30年度に分析を行った越冬キャベツ作付け予定地のpHを示しました。

適正な畑は47%とほぼ半数ですが、6.0以下の割合は34%と多く、酸性矯正の必要がありました。一方、pH6.5を超えるアルカリ性も18%ありました。

越冬キャベツは、石灰欠乏症、通称「枯葉(カレハ)」が発生しやすく、商品価値を低下させています。とくに、品種では「冬駒」に発生しやすいです。越冬キャベツの石灰欠乏症は、干ばつ時の土壌水分不足や窒素の過剰施用でも発生しやすいです。

対策は、炭カルを施用してpHを適正基準の「6.0～6.5」に矯正します。さらに、基肥施用時に「硫酸カルシウム(商品の一例として畑のカルシウムなど)」を、100～200kg/10a 施用することが有効です。

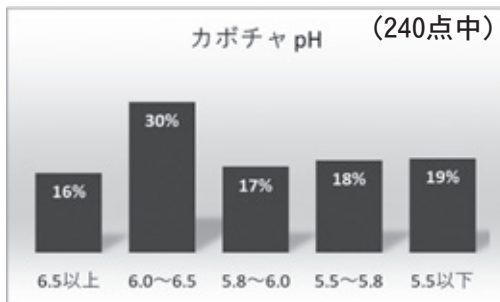


図-2

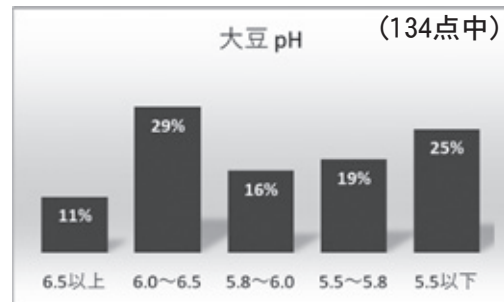


図-3

図-2と3に分析を行ったカボチャと大豆の作付け予定地のpHを示しました。カボチャと大豆の適正割合は約30%ですが、アルミニウムによる障害が発生しやすいpH5.5以下は、20～25%と多い結果です。

pHは人間の健康から見ると「体温」に例えられます。適正なpHを維持することで、効率的に肥料を吸収して安定した収量と高品質な作物が得られます。

その他作物にとってもpHは重要です。日本の土壌は、自然のままだと酸性寄りの傾向がありますので診断による適正施肥をお勧めします。

お問い合わせは農業活性化センター (TEL32-2010) まで

こんにちは 農業委員会です！

農業委員会総会の会議結果は下記のとおりです。

●第5回 農業委員会総会

日時・場所 5月14日(金) 午前8時30分 役場第2会議室

出席委員 12名(全委員出席)

- | | | | | |
|-----|---------------|----|-----------------------|----|
| 議 件 | 1. 農用地の賃貸借の解除 | 3件 | 2. 農用地の売買 | 2件 |
| | 3. 農用地の賃貸借 | 1件 | 4. 農用地の使用賃借 | 1件 |
| | 5. 農用地の転用売買 | 1件 | 6. 農業委員会の法令遵守の申し合わせ決議 | |

お問い合わせは農業委員会 (TEL32-2435) まで